

「チェルノブイリ通信№17」をお届けします。いよいよ11月1日に「サナトリウム・キュウシュウ」がオープンします。オープンに合わせて九州から代表団を派遣しようとメンバーの募集をしていましたが、今回も4名行くことになりました。厳寒のベラルーシですが、元気に行ってきたてもらいたいと思います。出発は11月6日午後2時、成田発です。

今回の行程は、ミンスクとゴメリということで考えていましたが、時間的に厳しいようなのでゴメリ行きは中止し、ミンスクでの調査活動に重点を置きたいと思います。調査活動としては、

1、「サナトリウム・キュウシュウ」の全容。（どういふ子どもたちが収容されているのか。施設での教育の問題。医療の問題。費用の内訳など。）

2、施設に入所している子供たち一人一人の状況把握。

3、職員の紹介。（以上はサナトリウムについての調査活動です。）

4、保健省への訪問。ベラルーシ全体の状況について保健省の資料をもらってくる。具体的には、白血病に関するのデータ。甲状腺ガンに関するのデータ。移住計画と現在の進展状況、今後の見通し。現在の汚染状況。（環境汚染と食品汚染など）

5、小児血液病センター、放射線医学センター付属病院（甲状腺専門）などの訪問。

6、汚染地域から避難してきた人々との交流。

7、住民がいなくなった村の訪問などです。以上の内容については事前に同盟の方に伝えてありますが、できるだけ皆さんの情報を集めてきてくれることを期待しています。

訪問日程

12月6日、14時に東京・成田を立ち、モスクワ・シュレメチボ空港に18時25分に着きます。（アエロフロート582便）空港にはモスクワ事務所のスタッフが出迎えにきてくれます。そのままホテルに移動し、12月6日の日はモスクワに泊ります。7日にモスクワ事務所の車でミンスクに入ります。

7日の日にチェルノブイリ同盟との打ち合わせを行います。取りあえず、8日のオープンセレモニーしか決まっていますが、上記の内容で日程の詰めを行います。

帰りは12月13日です。ミンスクを11時10分発の飛行機でモスクワへ。（アエロフロート1988便、モスクワ着13時25分）モスクワでの移動は、モスクワ事務所が車を出してくれます。モスクワ・シュレメチボ空港19時20分発の飛行機で東京へ向います。（アエロフロート581便）東京・成田へは14日の10時40分着になります。

以上の日程になりますが、くれぐれも風邪などひかないように頑張ってきてください。

調査団紹介

【中村隆市】（36歳）

（第二次調査団団長・事務局員）

1955年、福岡市生れ。映画学校に通っていたとき、水俣病の記録映画を見たのが環境問題に関心をもつキッカケになった。ふらついた性格のためか仕事も住所も一定せず、映像プロ、農業、廃品回収業、生協職員等を経て、現在、有機農産物産直センターで無農薬コーヒー（チェルノブイリ支援コーヒーなど）を焙煎している。いつの間にか、中学生と小学生の息子が二人と妻が一人おりますが、彼らは私のことを「わがまま、いいかげん、はくじょうもの」と言っています。彼らは「こんないい加減な人をベラルーシに派遣していいのだろうか」と真剣に心配しています。

● 抱負

事務局長の深江さんから「抱負を書いて下さい」と言われ、初めて、抱負らしきことを考えてみました。

ベラルーシ行の目的は、まずサナトリウムの運営費5万ドルと医療機器をシッカリと届けること。次に、サナトリウムの子どもたち（できれば家族も）とスタッフの写真を撮って、メッセージをもらってくださることがあります。その他にベラルーシの人たちと話したいと思っていることは、汚染されていない食物をどうや

って増産していくか、ということです。話が少し遠まわりになりますが、今年の8月にブラジルに出かけ、有機無農薬栽培コーヒーの生産者をさがして回ったとき、生産者の紹介と通訳をしてくれた日系人の続木さん（ブラジル有機農業協会の発起人で、現在、協会の農業技術者や農民に有機農業の技術を指導している人）に、チェルノブイリ支援運動のことや汚染されていない食物の増産の必要性を話したところ、支援運動にカンパを下さっただけでなく「私にできることがあれば協力します」という嬉しい申し出を受けました。続木さんはブラジルで有機農業の普及に取り組む中で、生産物の質と同時に量の増産にも、大きな実績をあげた人です。その技術が気候風土の違うベラルーシで、どれだけ生かせるかはわかりませんが、今回の訪問で早速、私が土壌分析値や生産方法の調査をしてくることになりました。その調査結果をもとに、続木さんにベラルーシでの有機農業の進め方を検討してもらう予定です。9月にベラルーシから来られたエレナさんの講演を聞いて、ベラルーシでも化学肥料が多用されていること、硝酸は放射能の体への作用を6倍から8倍も高めることを初めて知りました。500種類以上ある農薬と放射能の相互作用も心配されています。そういう意味からも、ベラルーシの有機農業（あるいは減農薬、減化学肥料農業）が広まっていくための手伝いができればいいなと思っています。

【大友慶次】（52歳）

東京からの参加です。「日本チェルノ

ブイリ連帯基金」の東京事務局をしており、ボランティア団体「まんだら国」の代表でもある。仕事は渋谷区立心身障害者福祉センターの指導員。出身はなんと福岡県田川市です。10月24日にあったカタログハウス主催の「チェルノブイリ救援グループ全国会議」の場での、『いっしょに行ってもいいかな』の一言で今回の同行が決まりました。

【渡辺文美】（30歳）

大分市内で、家業の事務経理をしながら、グリーンコープの環境サークルに属している。今回の話は、突然の話でとまどいながら引き受けたのだが、力の及ぶ限りで責務を果たしたいと思っている。個人的な気持ちとしては、「人に会いにゆくのだ」というフィーリングを大切にしたいと思っている。

【村上稔子】（41歳）

自然との調和のとれた熊本に住んで13年になる。東京で高校卒業まで育った私は、大学進学のため、アメリカ・ニュージャージー州へ移り住んだ。

アメリカ人の家庭に寄泊し、近くの州立大学・ラットガースに4年間通った。広大なキャンパスには自然が満ちあふれ、緑の青さに心が和んだものだ。夏休みには両親の住むエチオピアで1ヶ月程過ごし、さらに1ヶ月はヨーロッパの知人達の家を泊まり歩いた4年間であった。卒業後はエチオピアで2年間、現地の子供達に数学を教えたり、日本人補習学校の教師をしたりしながら、アフリカの国々

を旅した。その後、仕事のためアメリカに渡り、4年間ニュージャージー州に住んだ。その間に隣の州ペンシルヴァニア州でスリーマイル原発事故が起ったが、仕事仲間で話題にはなったものの、通常の状態でも人間は何かしら放射線を受けているのだからと、危険ではないと思っていた。原子力は必要不可欠な動力の源であると信じて疑うことはなかった。アメリカの自動車部品メーカーの駐在員として日本に戻り、ファックス、電話、飛行機を、仕事を遂行するための武器としてフルに活用しながら、熊本ー東京ーアメリカを行き来し、ひたすら仕事に夢中になっていた。子供は社会が一緒になって育てるもの、母親であつても働くのは当然とばかりに、まず第一に会社、そして家族は二の次というのが、私の生活パターンになっていた。

そんな生活をしている時に、盲腸で1週間の入院生活を強いられ、子供達の看護を受けることになった。家族の大切さを再認識すると共に、人間生きてゆく最小の単位は家族であり、家族がいなければ子孫が育つこともなく繁栄は有り得ない。自分の能力を研くことばかりに夢中になるだけではなく次世代の育成に力を注がなくてはいけないと気付くようになった時、熊本でチェルノブイリ支援運動をしているある女性に出会った。彼女は専業主婦で3児の母である。社会との関わり合い方の大事な側面を彼女を通して教えられることになった。彼女から送られてきた幾冊にも及ぶチェルノブイリに関する本を読むにつれ、チェルノブイリ事故によって引き起こされた惨事が、いかに我々の「生命」に関しての問題提起で

あるかが、震撼と伝わってくる。

自分のことばかり考え生きてきた私にとって、チェルノブイリ事故後、何がウクライナやベラルーシで起きているか、生の声を聞いた事もまた、大きな衝撃であった。小児科医の目から、母親の目から、エレナ・リスチョバは如何に子供達をチェルノブイリの後遺症から守る努力をしているか語った。目に見えない大気によって、雨によって運ばれ、チェルノブイリから数百kmも離れている土地が汚染され、6年前に起こったことに今もなお大きく影響を受けている子供達。遺伝学的影響について現場の声を聞くことは、活字とはまた違う重い思索を心の中に植え付けられた思いだ。現地声を「生」で聞き、我々の身近な問題として重くのしかかってくる。目の前にいる人が受けている受難をいつ我々が、そして我々の子供達が負うとも限らない。一時的な災害ではなく、幾世代に渡りガン等の病として後世の人達に影響を及ぼす。人間だけでなく自然の中にあるすべての生命体が、チェルノブイリという人為的な災害で脅かされる。エレナと話してこのようにことがひしひしと私の体に伝わってきた。

我々を取り囲んでいる素晴らしい人々や、そして自然を守るために行動を起こさなければいけない。新聞やテレビでの報道を与えられたものとして、ただ聞き流すのではなく、一人一人が行動して、この自然を守るのでなければ「地球の破壊」という大きな河に流されてしまう。こんな気持ちから、このチェルノブイリ支援運動・九州に参加するようになった。自然との調和のとれた熊本を我々の次の

世代に健全な形で継承してゆくためにも、チェルノブイリ支援運動の意義は多いにあると思う。

何がチェルノブイリで起こったかを多くの人々に知らせ、またチェルノブイリの後遺症と闘っている人々と一緒に問題を考え、問題を解決していくことは同時代に同じ地球上に生を受けた者として、成して行かねばならない義務だと思う。

会費の納入をお願いします!!

前回の通信で、会計報告をお知らせする予定でしたが、現在行っている里親運動・サナトリウム基金の整理などで仕事が遅延しております。

詳しい報告は次号ということでご了承ください。

さて今回は標題の会費の納入のお願いです。

このチェルノブイリ支援運動にご賛同、ご協力していただき、この通信をお送りしている方々も現在では、600名を越えるようになりました。運動が広がることはとても大事なことで喜ばしいことではあります。今までに支援運動・九州としては「チェルノブイリ通信」の発送、そして他にリーフレットの作成など行ってきました。そしてこうした経費は皆さんからの会費で運営していくようにしております。

1回の通信を出すにあたってかかる費用は、郵送料、紙代、そして印刷費等で約4万円ほどはかかります。昨年より現

在までで約80名ほどの方達からのご入金で約30万円ほど集まっていますが、これでは経費の方がかかりすぎるようになります。(昨年より通信は10回は発送していますので)

つきましては、今回この手紙が同封されてる方は、会費の納入をお願いしたいのです。(すでに納入されておられる方はお見捨ててください)

募金や里親や基金をお寄せくださった方のなかには、会費イコール会員ということに対して、そういった形はとりたくないと思われる方もいらっしゃると思います。そういった方に、支援運動としては無理にお願いするということはいたしません。しかし、通信だけでもお送りするという形がご希望であれば、先に書きました現状をご理解いただき、通信費という形でもけっこうです。それは支援してくださる方のご判断におまかせいたします。

そしてまた、会費納入をしていただいた方には、一年後にこちらから会費の納入のお願いをさせていただきたいと思えます。

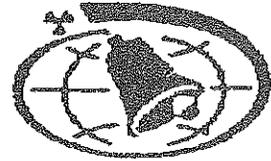
ご入金される場合についてですが、入金の種別をはっきりと明記していただけると、こちらの事務上の処理がとても助かりますので、何卒よろしくお願い致します。

最後になりますが、支援運動・九州にご意見やご不明な点などがありましたら、事務局までご連絡ください。

11月26日

チェルノブイリ支援運動・九州事務局
担当：安部

サナトリウム「キュウシュウ」
への入所案内



Беларускі
сацыяльна-экалагічны саюз
"Чэрнобыль"

Молодежный
реабилитационный
центр

"Кюсю-на-Свислочи"



里親の皆様へ

このたびは、チェルノブイリ支援運動・九州の里親運動にご協力いただきましてありがとうございました。おかげさまで、サナトリウム九州がオープンすることとなりました。これも皆様の暖かいお気持ちと、貴重な行動の実践によるものだと事務局一同、感謝と敬服をしております。

さて、皆様にはサナトリウムオープン後、現地より資料が着き次第、「里親カード」を送らせていただきます。また、サナトリウムの状況、子ども達の生活の様子などを載せた、「里親通信」も定期的に発行する予定です。里親の皆様とミンスクを結ぶものになればと思っています。これには皆様の声も載せたいと思っていますので、ご投稿、ご意見をお待ちしています。

さて、もう一枚同封しておりますのは、里親からサナトリウムの子ども達に渡すカードです。お手数とは存じますが、ご記入の上、写真（お友達、ご家族と一緒に写ったスナップ写真でも結構です。写真の裏に名前を記入のこと）を貼ってご返送下さい。なお、今月末まで到着したものは、今回早速現地へ持っていきます。よろしくお願ひします。

※里親運動について、ご不明な点などありましたら、どのようなことでもお気軽に事務局の方までおたずね下さい。

里親カードの書き方（例）

里親カード（親）	
	
氏名	○田○子
住所	福岡県北九州市小倉南区……
生年月日	1962年12月1日・29歳
自己紹介	家族は、夫と8歳の娘と2歳の息子です。趣味はカラオケ、テレビのチャリティ支援運動の事務局の仕事として……です。 よろしく！

。複数人数で1口申し込まれた方は、1枚に書かれても、同様のものをコピーして1人づつ書かれても結構です。その際、その旨がわかるよう明言し、数枚になる時は、ポツキマス等でまとめられて下さい。

里親カード (子供)

チェルノブイリ支援運動・九州

ИМЯ И ФАМИЛИЯ

(氏名)

ДЕНЬ РОЖДЕНИЯ

(生年月日)

(写真)

ВОЗРАСТ

(年齢)

МЕСТО РОЖДЕНИЯ

(出身地)

РОСТ И ВЕС

(身長・体重)

СЕМЬЯ

(家族構成)

ЦЕЛЬ ВСТПЛЕНИЯ

В САНАТОРИЙ

(入所目的)

ПРЕЛЕСТЬ,
ОСОБОЕ УМЕНИЕ

(趣味・特技・
好きなもの)

(自己紹介、今思っている事など
ご自由にお書きください)

サナトリウムの住所

里親カード (親)

チェルノブイリ支援運動・九州

写真

(写真の裏に名前を記入のこと)

(ふりがな)

氏 名

.....

住 所

.....

生年月日・年齢

(西暦で)

.....

自己紹介・その他

(ご自由にお書き下さい)

ベラルーシ社会エコロジー同盟・チェルノブイリの皆様へ
サナトリウムの開所式典に寄せて

サナトリウム・キューシューの開所をお喜び申し上げます。

チェルノブイリ原発事故が起きた1986年4月26日以来、私達は、被害現地の方々への放射能の影響を心配していました。なぜなら、私達は広島と長崎を通して放射能の恐ろしさを知らされてきたからです。チェルノブイリは、しかし、私達の予想以上の範囲を汚染し、私達の予想以上の人々が被曝しています。

私達は、9月12日に熊本大学にてヤコベンコ氏とリスツォーバ氏をお迎えして“チェルノブイリ現地报告会”を開催しました。そこで、ヤコベンコ氏とリスツォーバ氏の報告から深刻な現地のような状況を知らされました。

私達、报告会の参加者は、この报告会をきっかけにして、「チェルノブイリ基金・くまもと」を10月17日に発足させました。もっと多くの熊本の人々に私達の知ったことを伝える為に、現地の様子を正しく知る為に、そして、被曝し病気になった子供たちの療養に必要な費用を支援するためにです。更に、私達が放射能とどう向き合って生活するか、原発を作らせないためにどういうことをしていくか、チェルノブイリの悲劇を繰り返さないために知恵を出し合う会にしたいと思っています。

チェルノブイリは人類が経験した最大の放射能被害です。これからどうなるのか誰も知りません。でも、私達は、今、あなた方と一緒に、できるだけ多くの子供達の健康を回復させる為のサナトリウムの運営を支援致します。

皆様の御健闘をお祈りいたします。

1992年11月21日

チェルノブイリ基金・くまもと

Беларускі
Сацыяльна-Экалагічны
Саюз "Чарнобыль"



Belarusian
Socio-Ecological Union
"Chernobyl"

Рэспубліка Беларусь
220048 Мінск, вул. Мяснікова, 39
Тэлефон (0172) 20-39-04
Тэлефакс (0172) 23-90-14
Афіцыйнае прадстаўніц у ЗША:
IPV News USA Inc.
30 Farragut Str., Unintown, P.A., 15401
Тэл. і факс: (412) 437-5808

Republic of Belarus
220048 Minsk Miasnikov street 39
Telephone (0172) 20-39-04
Fax (0172) 23-90-14
Official Representative of the USA:
IPV News USA Inc. 30
Farragut Str.,
Unintown, P.A., 15401
Ph. and Fax: (412) 437-5808

Mr. Mamoru Fukae
The movement for help
to Chernobyl of the
island of Kyushu
Fax (093) 452-0665
Kitakyusyu, Japan

Dear Sir,

18th November 1992

The Belarusian Socio-Ecological Union "Chernobyl" invites to delegation of the movement for help to Chernobyl of the island of Kyushu to pay a friendly and business visit to the Republic of Belarus in December of 1992 for the period of one week starting from the fifth of December 1992.

We invite the following people from Kyushu:

1. Nakamura Ryuichi (aged 37) male
2. Otomo Keiji (aged 52) male
3. Watanabe Ayami (aged 30) female
4. Murakami Toshiko (aged 41) female

We shall provide for your residence and transportation on the territory of Belarus.

Yours sincerely

Vasil Yakavenko,
President of the
Socio-Ecological Union
"Chernobyl"